

中国系移民の複合的な「ホーム」

——あるミャンマー帰国華僑女性のライフヒストリーを事例として^{*1}

奈倉京子

はじめに——「ホーム」の再考

数世代にわたって本国を離れていた人々が一度も足を踏み入れたことのない土地をどのような意味において「ホーム」(故郷)と捉えるのか(あるいは捉えないのか)。この場合、郷愁の対象が帰還先(本国)であるとは限らず、かつての移住先である場合もある。「ホーム」とはその個人の出身地であったり、その民族の先祖といわれている人の出身地であったりする必然性はない。重要なのは故郷との結びつきに対する記憶や信仰であり、ときにそれは戦略性をも帯びる。

近年、国際的な人口移動を対象とした文化人類学的な調

査・研究が進むにつれ、移住した人々が出身国に戻るとい
う、いわゆる帰還移民を対象とした研究がなされるよう
なった(Long and Oxfield 2004; Tsuda 2009; 大川 二〇一
〇)。ここでは、出身国に戻る人々の多元的な経験が帰還
移民(return migration)や循環移民(circular migration)、
帰郷(homecoming)といった異なる含意を持つ用語によ
り分析されてきた。だが多くの研究は、帰国(帰還)とは
一方向的かつ完結的な概念であると理解し、移民にとつて
の祖国や故郷を持つ意味を単純化して捉える傾向があった
(Gmelch 1980)。したがって、「帰還」とは単に移民が出身
国に戻るだけでなく、頻繁な往復や第三国への再移住、出
身地と同時に移住先も「ホーム」として認識されるという
多元的な故郷認識といった問題を内包していることが十分
に議論されているとは言い難い。

他方、トランスナショナルリズム研究やディアスポラ研究では、複数の国家を頻繁に往復する人々を考察の対象とすることに、国境を越えたライフスタイルや脱領土的なアイデンティティ（ホームランド）を過度に重視する傾向がある（Ong and Nonini 1997； Ong 1999； Tsuda 2009）。たとえば日系ブラジル人を研究するツダ・タケユキ（Tsuda）は、「エスニックな帰還移民は、移民受け入れ国と輩出国の双方につながりをもつトランスナショナルなコミュニティに生きている。しかし、一般的な移民と異なり、国境を越えて結びつくことは、一つのホームランド（エスニックなホームランドと出生のホームランド）の間で構築される」と述べている（Tsuda 2009: 9）。

だがこのような枠組みでは、かつての「祖国」（祖先の出身地であるがそこでの生活経験がない）に戻った移民たちが、絶えず自己認識を問い直し、場合によってはかつての移民先を自己の故郷として改めて認識したり、どこにも故郷を見出していなかったり、「二つのホームランド」以外の場所（時には創造された場所）に「故郷」を見出しているような現象を十分に捉えることができない。このような反省を踏まえ、人類学的視座から移民の故郷認識について調査を行った研究を参照したい。たとえば市川哲は、ニューギニア・チャイニーズにとつての移民母村と移民先との関係を、中国、パプアニューギニア、オーストラリア

という三地域に注目することにより、海外華人の故郷認識について考察した。現在、パプアニューギニアやオーストラリアに居住する海外華人にとつて、祖先の出身地としての「ホーム」中国は、「間接的な経験」に基づく文化的・民族的アイデンティティの対象として重要性を持つが、実際には「直接的な経験」に基づく生まれ育った場所が現実的なホームであると認識されていることを明らかにした（市川二〇〇九）。

さらに、確固としたホームをどこにも見出せない帰還移民が独自の組織を作り、「ホーム」の代替の場を創造していく事例について人類学的考察を行った研究にも注目したい。たとえば、足立綾は、フランスの「ピエ・ノワール」（黒い足）を意味する、仏領アルジェリア帰りの引揚者たちを指す俗称。公称は「アルジェリアからの引揚者」を意味する「ラパトリエ・ダルジェリ Les rapatriés d'Algérie」を対象に、一九七〇年代から、出身地域や出身校、職業を同じくする人々が親睦を深めることを目的としてできた友の会や、各地に離散した「同胞」たちの連帯を改めて深めるための文化団体の「セルクル・アルジェリアニスト」（セルクル）といった組織的な活動についてフィールドワークを行った。セルクルの活動は、記憶を継承する場、失われたホームを代替する場となつているという存在意義がある（足立二〇一三：六三―八六）。

このようにホームに代わる場を作り出そうとする移民の試みは中国系移民にも見られる。筆者は、帰国華僑が時間と空間を共有するコミュニティ（場）である「帰国華僑の家」を事例とし、そこで帰国華僑としての特異性、アイデンティティを再生産させていく様相について考察した。そして個人や家族レベルの記憶・経験や、個別の行き来を中核として構成される社会関係を実証的に検討することにより、「帰国華僑の家」の場の意義と機能を示し、それによ

り帰国華僑の多面的かつ動態的な「ホーム」について考察した。「帰国華僑の家」は、帰国華僑の居場所・抛り所の不安定さ故に必要とされているのである。安定した、永久的な居場所を「ホーム」とすると、中国か元移住先国かといった国家レベルにせよ、地元の人々との関係や文化の相違などに係る社会・文化レベルにせよ、確固たる「ホーム」を見いだせない帰国華僑は、「帰国華僑の家」をある種「ホーム」の一つとして代用しているのではないか（倉二〇二一）。つまり、特定の土地との結びつきにおいては確固としたホームを見いだせないが、それ故につながりの結集したプラットフォーム的な「ホーム」を創造できる積極的な側面もある。

また、脱領域的な移動が、必ずしも国境を無効化するとは限らず、実際の居住地や移民先の政治状況や社会的・文化的背景といった地域的特徴から多大な制限を受けること

も無視できない（飯島・大野二〇一〇・蘭二〇〇六）。たとえば、中国残留孤児の日本への引き揚げについて研究した蘭信三は、「単に望郷で祖国に帰国するだけでなく、日中関係の変化、日中両社会の変化、さらにはそのバランスの変化の中で考察する必要がある」と述べている（蘭二〇〇六・八）。これは移民を取り巻くマクロな国際社会の状況にも目を向ける必要性を示唆している。

これらの研究を踏まえ、本研究は、ある特定の土地に所属意識を見いだすことができず、土地と所属意識の結びつきから抜け落ちる人の「ホーム」について考えることを射程としている。ここで「ホーム」という語を使用する意図について説明しておきたい。本稿で用いる「ホーム」は、当事者の望郷の念や安住の地といった精神的抛り所としての「故郷」・帰属意識を表すこともあり、当事者自身の直接的な生活経験を伴わない祖先の出身地としての「故地」「祖地」を表す場合もある。国家を基準とする場合は、これは本特集のリード文で提示されている「祖国」という概念になるが、根本的に同じ考え方に基づいている。即ち、「祖国」も「ホーム」も、移民と国民国家との関係は避けられないことを考慮しながらも、移民がある国民国家に帰属意識をもつことを前提としているわけではなく、周囲を取り巻く環境の変化の中で、移民が個人として絶えず自己の抛り所（あるいは自分の存在意義）を問い直し続け、そ

それぞれの場面で「場所」（生き方）を選び取る側面に注目している。このような移民個人の経験のなかで、国家は自己との結びつきの対象の一つにすぎないと考える*₂。

このような眼差しから、本稿では、帰国華僑のライフヒストリーの収集と分析を行うことにより、中国―移住先の二国間関係に留まらない複数地点を結ぶことで形成される空間に生きる人々の「ホーム」の意味を問い直す。まだ見ぬ祖先の出身地を懐かしむことや「間接的経験」に基づく漠然とした故郷認識を抱くこと、ならびに代替としての「ホーム」の意義を問うといった想像レベルでの故郷意識の考察に留まることなく、中国系移民（帰国華僑）にとつての「ホーム」が、中国政府のプロパガンダ、移住先での現地化、一九六〇年代から七〇年代の中国の政治動乱、改革・開放後の経済発展、といった多様なファクターの中で絶えず意味づけなおされる流動的な存在であることを、ある特定の個人、Xさんとその家族に焦点を当て、彼女らの生活世界から実証的に切り込むことにより明らかにしようとする。Xさんは、ミャンマー（生まれ故郷のオティエゴン〈Othegon〉）、中国（江西省の撫州と福建省の廈門）といった移住先国と「祖国」の双方の複数地点における生活経験をもつ。彼女の実体験の聞き取りから「ホーム」を浮かび上がらせてみたい。

I Xさんの歩みと越境する家族

二〇〇八年一月二二日。筆者は福建省廈門市思明区にある「思明区僑聯センター」で清掃や接客の仕事をしていたXさん（一九五三年生まれ）と初めて出会った。「思明区僑聯センター」は、思明区に居住する帰国華僑が活動を行ったり、帰国華僑聯合会の幹部等が会議や親睦会を行ったりするために帰国華僑聯合会*₃によって創設された場所である。その日、廈門市インドネシア帰国華僑誼会*₄の一部の人たちがそこに集まり、社交ダンスを楽しんでいた。筆者はインドネシア帰国華僑のXさんの誘いを受けてそこにいた。筆者はXさんと出会った当時、廈門大学の寮に住んでいた。大学から「思明区僑聯センター」まではバスで約一〇分のため行きやすく、しばしば彼女を訪ねるようになった。二〇〇九年三月に筆者が日本へ帰国してからも互いに連絡を取り続け、毎年一回は廈門を訪れて近況を報告し合っている。筆者は二〇一二年八月から九月にかけて、Xさんとともにミャンマーを訪れ、ミャンマーで生活する彼女の親戚や同級生を訪問した。本稿で用いるXさんのライフヒストリーは、このような長期にわたる継続的な関係の中で得られた聞き取りに拠るものである。以下で取りあ

げる彼女の語りのデータは、事前にアポイントメントを取ってインタビューしたのではなく、自然な会話の流れの中で得られたものである。

Xさんのこれまでの歩みは、表1に整理した通りである。Xさんはミャンマーのオティエゴンという小さな町で生まれ、中学時代の後半までそこで過ごした。姉が二人、妹が一人、弟が二人いる。一九六九年、まずXさんと姉が帰国し、その後、両親と弟が帰国した。現在、両親は他界、姉の一人は香港、もう一人は福建常山華僑農場、第二人は福建にいる。Xさんは一九七八年に靴下製造工場の同僚でミャンマー（タウングー）から帰国した男性（一九五四年生まれ）と結婚し、一男一女をもうけた。上の娘は結婚し、広東省深圳で生活をしている。下の息子は北京の大学院在学中にアメリカへ留学し、帰国して博士号を取得した後、広東の大学で研究員をしている（二〇一二年の時点）。現在Xさんは先に紹介した「思明区僑聯センター」の仕事を辞め、孫の世話をするために一年の大半を深圳で生活し、時々厦門へ戻ってくるという生活を続けている。

X家で最初にミャンマーへ移住したのはXさんの父方の祖父である。祖父は福建省安溪の出身で、一三歳の時に移住した。祖父はミャンマーで三人の妻を娶った。一番目の妻は華人、二番目の妻はミャンマー人、三番目の妻は祖父と同じ安溪出身の華人であった。この三番目の妻をXさん

表1 Xさんの歩み

<p><u>1953年</u>：ミャンマーのオティエゴンに生まれる。</p> <p><u>1960年</u>：「<u>覚華小学校</u>」(中華学校)入学(4年制だった)。</p> <p><u>1964年5月～1965年3月</u>：ヤンゴン・ミャンマー華僑中学(6年制だった)。</p> <p><u>1966年5月～1967年3月</u>：7年生(中学3年生)の時、オティエゴンにあるミャンマー政府に属する中学に転校。</p> <p><u>1968年5月～1969年2月</u>：9年生(中学5年生)の途中で中国に帰国。</p> <p><u>1969年</u>：中国に帰国。江西に配属。江西についてから「撫州一中」に入学。</p> <p><u>1969年2月～1969年7月</u>：中学2年生に編入(ミャンマーで中学2年生相当まで終えていたが、中学3年生に編入すると半年で卒業しないといけなく、その後は農村に行かされることが多かったので2年生に編入した)。当時は「文化大革命」中で、教育が停滞していた。</p> <p><u>1970年9月～1973年7月</u>：高校入学～卒業。</p> <p><u>1973年～2003年</u>：撫州の靴下を生産する工場で退職まで働く。</p> <p><u>1978年9月</u>：ミャンマー帰国華僑の男性(1954年生)と結婚。</p> <p><u>2005年</u>：戸籍を厦門に移す。</p> <p><u>2010年3月～4月</u>：帰国後初めてミャンマーへの親戚訪問。</p> <p><u>2012年8月～9月</u>：帰国後2回目のミャンマーへの親戚訪問。</p>

は継祖母(「后奶奶」と呼んでいる。二番目の妻との間に子どもはないため、X家のミャンマーを起点とする家族の系譜は父方の祖父と一番目の妻との間にできた家族(拡大家族を意味する)と、三番目の妻との間にできた家族からなる。本稿では前者を家族①(図1を参照)、後者を家族②(図2を参照)とする。Xさんは家族①の系譜に属する。家族②の成員の中には、台湾、シンガポール、タイ、アメリカへ移住した者が多く、ほとんど連絡を取っていない。そのため、Xさんに家族について尋ねた時、家族①の成員については第五世代まで辿ることができたが、家族②の成員については第三世代までしか辿ることができなかった。

Xさん一家は伯父一家(家族①(へ1))とは同じ家に住んでいた。同じ系譜に属する同輩の従兄・従姉(家族①(へ2)や(へ4))とは関係がよく、今でも密に連絡をとっているのは彼らである。

Xさんの記憶によると、一九六三年、六四年頃から華人に対する風当たりが強くなり始め、Xさん一家は帰国を選択することとなった。彼女の記憶を裏付けるような出来事として、たとえば一九六七年六月二六日にラングーン(現ヤンゴン)で発生した華僑排斥事件がある。この事件の背景には、中国の文化大革命における革命外交路線とミャンマーの「ビルマ式社会主義」との衝突があったが、同時にミャンマーのネーウィン政権による内政問題の外交問題へ

の転嫁という側面もあった。一九六二年にネーウィン政権が成立して以降、経済の国有化政策が急激に進展し、流通の停滞などにより深刻な物不足に陥り、人びとの不満が高まっていた。一九六七年にコメ不足が生じ、商店や倉庫を略奪する人びとが現れ、軍政権は対応に苦慮し始めていた。こうしたなかでちょうど同じ時期に、華僑の「バッジ事件」が一九六七年六月に発生した。文化大革命の影響を受けて、ラングーンの一部の華僑華人学生が毛沢東バッジを着用し始めたため、当局はこれを禁止した。これを不満とした学生はデモを行い、当局と衝突するようになった。

この衝突は、ラングーンにある在ミャンマー中国大使館の極左派の支持を受けて、日々激化していった。ネーウィンはこれを利用して、民衆の不満の矛先を華人に向け、内政の危機を回避しようとした。その結果、数十名の華人が殺害され、多数の負傷者が出た(範・金二〇〇九: Steinberg and Fan 2012: 93-118)。

ところがこのような華僑排斥の状況のなかで、中国への帰国を選んだ人は残留を選んだ人よりも少なかったようである。Xさんの親族(家族①(へ2))の中で帰国を選んだのは彼女の家族のみであったし、帰国した人はオティエゴンに残った人よりも少なかった。また彼女の同級生のほとんどが帰国しなかった。その理由について、彼女とオティエゴンを訪れた時に、かつての同級生に尋ねたところ、①旅費

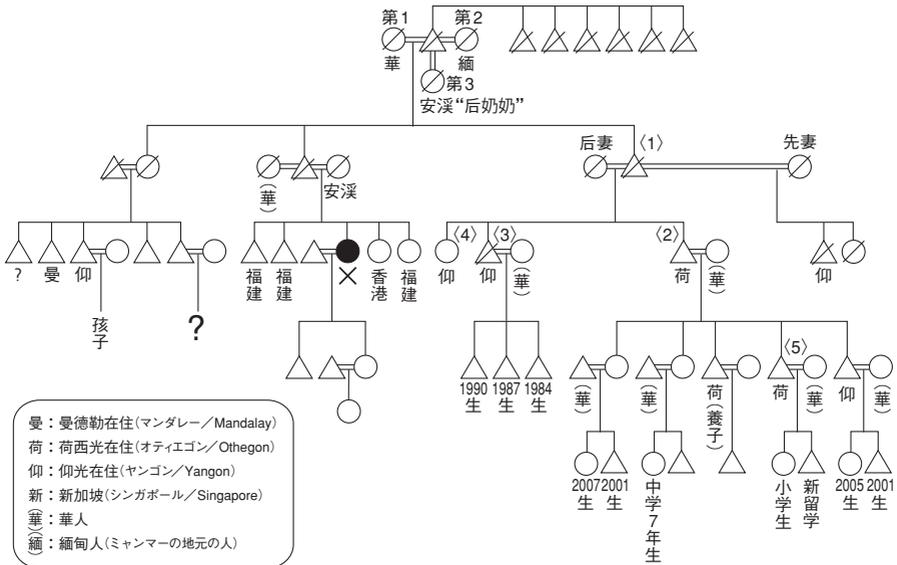


図1 家族① Xさんの父方祖父の一番目の妻との間の家族

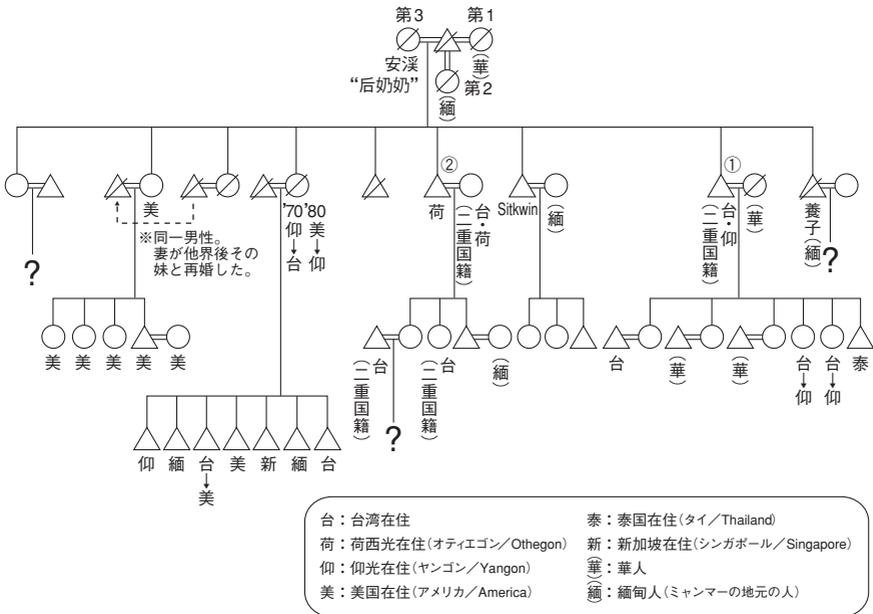


図2 家族② Xさんの父方祖父の三番目の妻との間の家族

がなかったため、②中国に行つてからどのように生計を立てていったらよいかわからなかったため、③両親が帰らないと決めていたので、離れがたかったため、ということであった。ある男性は、兄弟姉妹が多く、彼は長男だったので家に責任があり戻れなかったと話していた。帰国はまずヤンゴンから中国広東の広州まで飛行機で行き、列車で昆明まで行った。昆明に中国政府の関係者（僑務弁公室の人）が迎えに来て、空港から昆明にある華僑旅行社へ連れて行つてくれた。そこで登録票が配られ、個人情報記入した。その内容で最も重要だったのは、今後、国の手配に従うか、自分で生活していくかを選択する欄であった。Xさん姉妹は国の手配に従うことを選んだ。こうして江西に行くように手配され、江西に到着後、撫州第一中学・高校（「撫州一中」。中高一貫の学校）に行くことになった。以上の経緯からわかるように、Xさんはミャンマーに渡つた家族の中では第三世代で、ミャンマー（オティエゴン）で生まれ育ち、もともと中国での直接的経験はなかった。このような出生背景をもちながらも、ミャンマーで生活していた帰国前は、まだ見ぬ中国に強い故郷意識を抱いていた。以下では、ミャンマーと帰国後の生活環境の描写から、Xさんにとって中国はどのような存在として認識されていたのか、そしてその認識がどのように変化したのか、それはなぜかということについて検討していく。

Ⅱ 複合的な「ホーム」

1 ミャンマー（オティエゴン）の記憶と

つながり

中国に帰国する前の記憶

最初にミャンマーへ渡つた祖父は、いくつかの場所を回つた結果、土地が安く、米の工場が建てやすかつたためオティエゴンに落ち着き、当初は華人が経営する工場（油か米の工場、定かではない）で働いた。その後数人で出資をして米の工場を建てた。祖父は商売に長けており、工場で儲けた後は、金貸し業を営んでいた。父は一九三〇年代に日本軍の攻撃から逃れるために安溪に一時帰国したが、ミャンマーが独立した後、一九四八年にミャンマーに戻つてきた。しかし家は日本軍に焼かれていたため、一時、伯父（帰国しないで農村に隠れていた）の家に身を寄せていた。その後、祖父、父、伯父の三人で雑貨店を始め、商売を拡大していき、富を蓄えていった。Xさんによれば、父が一九四八年にミャンマーに戻つてから中国に帰国するまでの約二〇年間で、X家が最も裕福な時期だったそうである。

こうしたなかでXさんは、幼少時代を経済的に裕福な家庭で過ごした。一日五円で家族八人を養えた時代に、父は娘三人を学校へやった。一人あたり月六〇元かかるので、三人で月二〇〇元はかかった。当時は、女子に教育を受けさせることは珍しいことであり、隣家に住む親戚の女性に、「女の子はどうせ嫁にいつてしまうのだから、教育する必要はない」と言われたことを、Xさんは記憶している。

Xさんは中学からヤンゴンの中華学校に通っていたが、中学二年の頃から、華僑排斥の雰囲気が高まってきて、ミャンマー語中心のカリキュラムに変わり、一九六六年、中学三年の時、オティエゴンにあるミャンマー政府に属する中学に転校した。そのため、Xさんはミャンマー語の読み書きができるようになった。他方で、夜になると中国廟で行われていた中国語の塾に通っていた。華僑排斥の雰囲気に反して学校では同じ長机の隣に座っていたミャンマー人のクラスメートと仲が良く、他の華人もミャンマー人のクラスメートと打ち解けていたため、ミャンマー語も覚えた。しかし、家に帰ってミャンマー語を話す祖母に叱られた。「ミャンマー語を話すようになって、祖国を忘れてしまう」と言い、両親にも子どもにもミャンマー語を使わせないように注意した。雇っていたミャンマー人の召使いにもミャンマー語を使わないように言い、閩南語を覚えさせた。この状況から、家庭では父方祖先の出身地（安溪）

の習慣に基づいて生活していたことがわかる。

筆者が二〇一二年八月〜九月にXさんと同行し、オティエゴンを訪問した際、彼女の従兄であるA氏の家（家族①の（2））に滞在した。ただし訪問時にA氏は不在であったため、A氏の息子B氏（家族①（5））夫妻の世話になった。B氏は四〇代で大卒であり、精米・販売と黒豆の貿易に従事している。

B氏によると、オティエゴンには中心部と周辺の村々の人口を合わせて約二五〇〇世帯が住んでいる。そのうち華人家庭は約二〇世帯ほどで、みな中心部で生活している。

この集住地区に住む華人の家は外観から「華人」とわかる特徴があった。門には「福」の字や対聯（対になっている

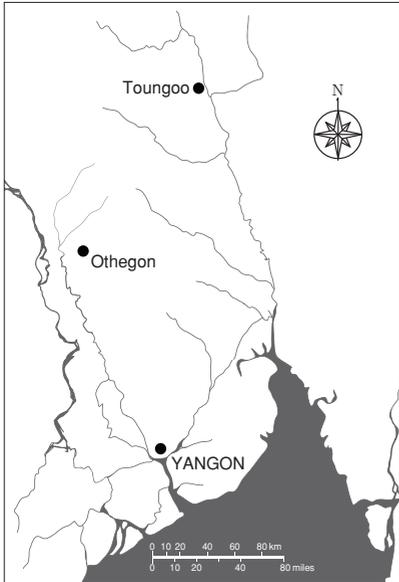


図3 オティエゴン (Othegon) の位置

掛け軸)が貼られ、家の中には旧暦の書かれたカレンダーがあった。他方で仏教を信仰しておりすべての家で仏壇を見ることができた。筆者が調査した時期はちょうど中元節の時期に重なり、閩南の習慣に従って粽を作ったり、道で三角に折った紙を燃やしたりしている風景も見られた。今回の訪問で驚いたのは、独身の華人女性が多いことであった。華人男性も女性も、結婚相手として華人を好む傾向にあるという。とくに、女性は家庭が貧しく、裕福なミャンマー人男性に嫁ぐ場合を除いて、華人男性と結婚したいと思っている。このように華人を結婚相手に選ぶ傾向が強いことが、オティエゴンの華人コミュニティを維持する要因の一つとなっている。

オティエゴンの約二〇世帯の華人家庭は何らかの親戚関係にあり、お互い知らない者はいない。華人と地元のみyanmar人は住み分けがされている。図4・5で示したように、中心部には三本の道があるが、第一と第二の道は「唐人街」(チャイナタウンの意味)と呼ばれ、華人の民家、雑貨店、元中華小学校、廟等が並んでいる。第三の道にはミャンマー人が住んでいる。「幼い頃、第三の道には一人ではほとんど行きませんでした。怖かったです」とXさんが話していた。

華人はミャンマー人とは異なる彼ら特有の習慣に従って生活をしてきた。華人の廟の「玉皇宮」は、華人が輪番で

管理してきた。毎年「玉皇大帝」の誕生日(春節初九日)の前日に向こう一年の当番をくじ引きで決める。当番になったら農曆の毎月一日と一五日に香を焚きに来ることにしている。清明節の時に、親族が台湾や大陸などへ移住してしまい、誰も墓参りをするのができない墓を代わりに掃除をして供養するのも、当番の仕事である。また、墓地を作り、墓参りをするのも華人の習慣であり、一般に地元のミャンマー人はそれらを行わない。このような習慣の違いはあるが、華人とミャンマー人は衝突することなく、華人排斥の気運が高まった時でさえも、両者の関係は良好であった。華人はミャンマー人の仏堂のためにしばしば寄付をしてきたし、華人も仏教を信仰するようになった。

ミャンマー時代のXさんは、「小中国」(彼女がオティエゴンでの生活空間を中国語でこのように表現した)とも呼ぶべき中国と同じような空間に取り囲まれていた。こうした生活空間においてXさんは、必然的に華人として生活してきたことが分かる。この時期のXさんは、オティエゴンという土地で華人としての生活を実践し、それによって華人としての意識を持っていた。その意味において、この時期にXさんの中では、土地と帰属意識とが結びついていたと言える。

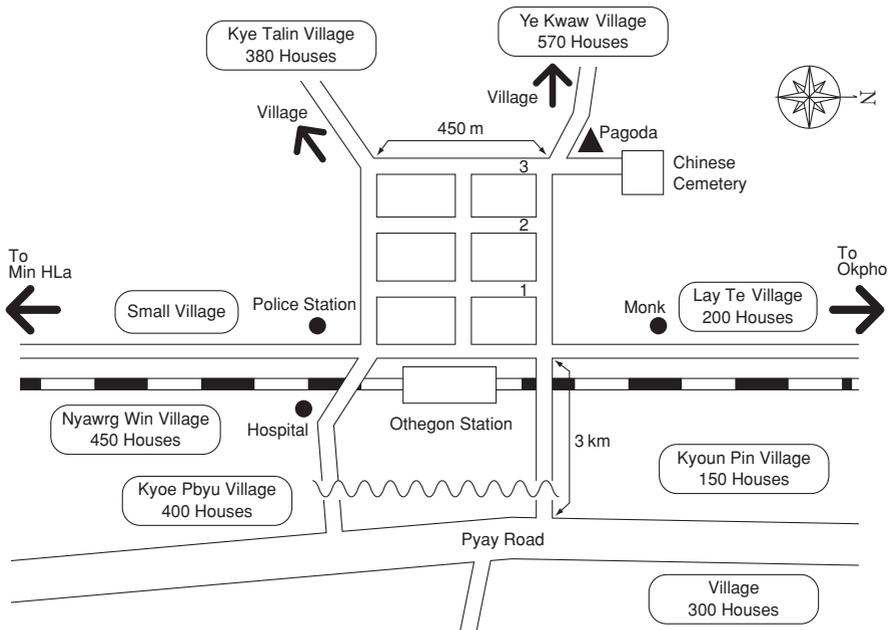


図4 オティエゴンの中心部

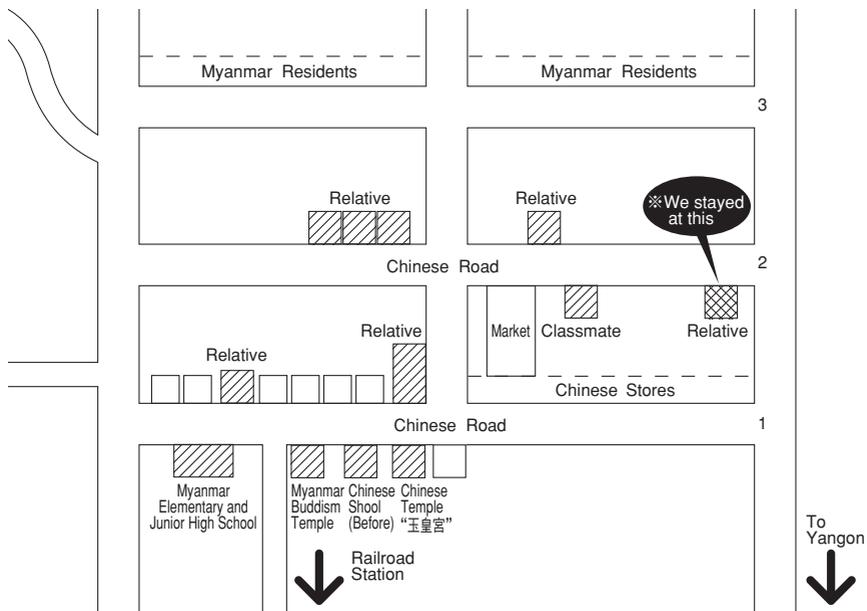


図5 ミャンマーの親戚の住む場所

ミャンマー再訪、国家認識と個人の自己実現との矛盾

彼女は中国に帰国して以来、これまで二度のミャンマーへの親戚訪問をした。一回目は二〇一〇年三月から一カ月、二回目は筆者も同行した二〇一二年八月から一カ月である。^{*6}

彼女は、四〇年振りにミャンマーに足を踏み入れた一回目の訪問の感想を次のように語った。「幼い頃を過ごした所へ戻り、今もそこで暮らす人々の生活が中国に到底及ばない様子を見て心が痛みました。帰国した時、中国も貧困の時期で辛い日々を送ってきたことを思い出しましたが、今はとても良くなりました。ミャンマーも早く貧困から抜け出してほしいです」。「ミャンマーは電力不足で毎日五時間くらいしか電気が使えませんでした。お金のある人は自家発電を利用しています。本当に不便でした。お金のある人だけが自分の家を持ち、良い生活を送れます。汽車はとても古く、交通が不便です。親戚がいなければミャンマーには行きません。やはり中国、厦門の方が良いです！中国は保障のある時代に入りました」。そして、従兄に帰国したことは良かったかと聞かれた時、「当時は帰国の選択が正しかったかどうかはわからなかった。私たちが帰国してからミャンマー政府の政策が変わり、華人も商売ができてようになったと聞いた時には帰国したことを後悔したけれど、中国の経済発展を見ると、帰国したことは正しかっ

たと思う、と答えました」。

これらの語りから、発展した中国と貧しいミャンマーを対比させ、中国全体の発展によって、Xさんやその家族が帰国を肯定できるようになったことがわかる。だが、Xさんの厦門の生活（家屋、収入）を知る筆者から見ると、ミャンマーの親戚の方が物質的に豊かな生活をしていることは一目瞭然であった。Xさんの家族のレベルで比較すると、ヤンゴンとオタイエゴンに住むミャンマーの親戚の経済状況の方が良好である。華人の多くが日用品を売る雑貨店を営んでいたが、Xさんの親戚も例外ではない。Xさんのヤンゴンの親戚には、宝石店や建設会社を経営する者もいる。前出のB氏も、精米と黒豆の貿易で高い収入を得ている。黒豆の売買は政府が独占していたが、一九八八年にそれが停止し、売買が民間に開放された。この機会に目をつけて黒豆を扱う華人が増え、B氏もその一人であった。また、ヤンゴンとオタイエゴンに住む親戚のほとんどが、B氏も含めて大学を卒業している。この点が中国で進学を目標としていたXさんにとって最も辛いことであった。つまり、個人の自己実現から見ると、Xさんは「発展した中国」での生活に満足しているわけではないのである。

今回の訪問で世話になったB氏夫妻は、Xさんにとって「後輩」である。Xさんは、「同輩とは話すことがたくさん

あるが、下の代とは共通の話題が少なくてあまり話すことがない」、「同輩が亡くなったらミャンマーにきても面白くない」と話していた。ミャンマーの親戚は共通の経験や記憶を共有できない世代に変わってきており、この事實は将来、Xさんのミャンマーの親戚との実質的な親交が希薄化することを示唆している。他方で、A氏を含めた従兄たちも中国に來たがっているが、それは中国に興味があるからではなく、Xさんの母親に会いたいからであると言う。幼い頃、近所に住み、良くしてもらったからだ。

つまり、国家の発展やイメージの向上は個人の国家に対する誇りを高めるが、その一方で、国家全体に対する感情は、個人的なつながりの親疎に左右されることが見て取れる。

2 重層的な中国認識

想像の中の理想郷・中国

華僑排斥が激しくなった一九六〇年代後半、Xさんの家庭では、父の雜貨店から始めた商売が軌道に乗り、家庭の経済状況は非常に良好であった。だが商売ができなくなる不安から、一九六七年、中国に帰国すべきか否かについて家族で話し合った。この時父は、中国への帰国に反対した。父は一九三〇年代に安溪に一時帰国した時、中国に對

してあまりよくない印象を抱いたようである。また福建省の武夷山に戻っていた父の姉の夫側の親戚からの手紙で、中国の生活環境が良くないことを知っていた。祖母も帰国に強く反対し、親を残して子どもだけで帰国することになればそれは親不孝にあたるかと怒った。それでもXさんは、中国に帰国する思いを強く持ち続けた。家族一緒に暮らすのがいいと母が父を説得し、最終的にXさんの父母と弟も中国に帰国することになった。

Xさんが中国への帰国を強く望んだのは、中華学校で受けた教育の影響であったという。彼女がミャンマーで生活していた当時、ヤンゴンには大きな中華学校が二つあった。南洋中学（略して「南中」と華僑中学（略して「僑中」）である。中国語で教育する学校は、小学校については小規模なものがあちこちにあったが、中学校については二つの中華学校のどちらかに進学するケースが多かった。Xさんは僑中に進学した。そこでは「祖国は中国である」という思想教育が施された。学校では大使館を通して入ってきた映画や『人民画報』等の雑誌をよく見ていたため、中国の変化を知り、国の発展を誇りに思うようになり、着実に前に進んでいる中国に少しずつ好印象をもつようになった。中国に関する情報源が多くあったため、まるで中国にいるような感じだったと言う。こうして中国は素晴らしい国であると思ひ込み、中国「中毒」になっていたと振

り返る。これに加え、中国語など中国文化を学び、中国に理解があったので帰国しても困らないと思ったこと、そして中国の高校、大学で勉強したい、教師になりたいという夢があったことが、中国に戻りたかった理由である。

Xさんが中国に帰国する時、クラスメートが裏にメッセージを書いた顔写真をプレゼントしてくれた。今でもその写真を大切に保管している。その中にはミャンマー人のクラスメートがミャンマー語で書いたものもあった。華人の友人が送ったメッセージの中に「毛主席の好い戦士になつてください」（「做一个毛主席的好战士」）というものがあつた。Xさんは、当時を振り返り、「共産党も仏教と同じように一つの信仰のようだった」と話す。

つまり、帰国以前、Xさんは教育の影響から中国を美化し、中国に自己実現の可能性を求めていたのであつた。

帰国後の中国認識の変化

帰国後江西省の撫州で生活することになったXさんは、撫州第一中学・高校の中等部二年次に編入した。寮生活をしてきたが、そこにミャンマー帰国華僑の学生しかいなかった。ルームメートだった「僑友」（とXさんは表現する。ミャンマー帰国華僑）二人と姉妹のように助け合いながら生活をした。彼女たちは一九七七年か七八年に香港へ渡つていった。香港へ行ってからもXさんの生活を心配し

て、しばしば衣類などを送つてくれた。今までずっと連絡を取り続けている。当時は文化大革命中で教育が停滞していたため、高校を卒業するまでの間、授業を受ける機会はほとんどなかった。

高校卒業後の一九七三年から、靴下製造工場に配属され、そこに退職年齢まで勤めた。工場で働き始めた時、彼女は「天から地へ突き落された気持ち」になつた。もともと大学に進学しなかったのに、理想とは異なる方向に人生が進んでしまったからだ。結婚・出産後は家事と育児中心の生活になり、「多くのことを犠牲にした」という気持ちが強くなった。このような理想を打ち破る撫州での生活経験は、撫州への愛着を失わせた。

一九八五年、親戚の男性（夫の母方の祖父とこの男性の父親が兄弟、つまり夫のおおじの息子にあたり、「表叔」と呼んでいる）が厦門にある夫の母方の祖母の家屋のことを教えてくれた。夫の母方の祖父もミャンマーに移民した。新中国成立後の土地改革の時、家屋も分配され、同じ村の農民に住まわせていたが、村人がその家をもともと誰のものか覚えており、無関係な村人の手に渡ることがないように、「表叔」に管理させており、権利書はずっと彼の元にあつた。権利書はXさんの夫に戻つたが、対面の家の人がずっとこの家屋を占領しており、自分のものにしたいために度々嫌がらせをしてきた。また、家屋のある村は、

四川などから来た出稼ぎ労働者が多く住むようになり、治安が悪くなっている。

このように生活環境や近隣との人間関係が良好ではなく、また撫州には工場から提供された住まいがあるにもかかわらず厦門へ引越すことにしたのは、Xさん夫妻が「祖先の家屋を豊かにすると、子孫も繁栄する」（「祖屋富起来、後輩也發展」）と表現したように、祖先の家を守りたいという考えからであった。僑郷（華人の父方祖先の出身地）に普遍的に見られることであるが、海外からの送金で出身母村に「洋楼」と呼ばれる豪華な家屋を建てることしばしばある。人が住んでいないこともよくあり、実用的に機能しているとは思えない。一見無意味な豪邸を建てるのは「祖先の家屋を豊かにすると、子孫も繁栄する」の観念からきていると思われる。これは日本的な親孝行に留まらない、祖先に対する義務をも伴うものである。

二〇〇五年、撫州時代の同級生（ミャンマー帰国華僑）で「福建省廈門市帰国華僑聯合会」の幹部をしている友人の助けで厦門に戸籍を移した。厦門においてXさん夫妻は、自分たちは「外地人」であるという意識を強く抱いているという。厦門にはミャンマー帰国華僑誼誼会があり、メンバーとして活動に参加しているが、この会の中心メンバーは一九八〇年代からずっと厦門に住んでいる人々で年齢層も高く、融け込めていない。

ミャンマー時代は同じ文化的背景を持つ人々と時間と空間を共有していた。つまり、特定の土地、人、文化習慣、「ホーム」（帰属意識）が結びついていた。帰国後、固定的な土地を基盤にした人間関係を持たないXさんにとって、移動とともに土地、人、文化習慣、「ホーム」（帰属意識）がそれぞれ乖離していったのである。

重層的な中国認識

帰国後、三〇年以上にわたる最も長い時間を生活してきた場所は撫州であり、同級生や同僚も撫州にいる。しかし、「あそこには気にかける人がいない」ので、撫州に再び戻って生活したいとは思わないと言う。苦楽を共にしたルームメイトが香港に移住してしまったことも影響している。

彼女の籍貫（父方祖先の出身地）は安溪だが、彼女自身はそこに一度も行ったことがない。撫州にいる時、「出身はどこですか」と聞かれると、「私たちには家がありません、帰国華僑です」と答えていた。厦門で出身地を聞かれた時は、同じ福建省内ということを意識して「安溪人です」と答えるようにしているが、すぐに「でもあなたの言葉は安溪の発音ではないですね」と言われてしまう。

Xさんとオティエゴン駅の看板の前で写真を撮った時、筆者が「ここはあなたの故郷だね」と言ったところ「故郷

じゃなくて出生地」と答えた。理由を尋ねると、「故郷と言った場合、祖籍を指すと思う。だから私の故郷は安溪。オテイエゴンは出生の場所」と言った。また、A氏の息子のうち、ヤンゴンに住む子ども夫妻とその孫を訪ねた時、週末の塾で中国語を勉強している一歳と七歳の子と話をした。七歳の子に「Xおばさんは中国人？ ミャンマー人？」と聞くと「彼女は中国人。中国語を話すから」と答えた。「彼女はミャンマー語もできるよ」と言うと「彼女は中国人でもあり、ミャンマー人でもある」と答えた。するとXさんが「私は中国人だよ。祖先が中国人だからね。祖先が中国人だったらミャンマー語を話せてもミャンマー人になることはないんだよ」と子どもに言っただけで聞かせていた。

こうして見てくると、彼女にとつての中国は、ミャンマー時代に理想的国家だと美化していた想像上の中国、帰国してから最も長い直接的経験のある撫州、そして廈門というように、想像上の中国から現実的な中国へと変化していった。その過程で自己実現が果たせず、裏切られた気持ちを抱かざるをえなかったのであるが、それをミャンマーに残って暮らす親戚に対しては「発展した中国」にいないということで、自分を癒しているように思えてならない。加えて、父方祖先の出身地の安溪、直接的な生活経験のある場所としての撫州、廈門、そして「発展した中国」と彼女に

とつての中国認識は重層的であり、語る対象によっても中国の顔は変化する。

おわりに——つながりに求める「ホーム」

Xさんの物語には、一九六〇年代のミャンマー軍政府による華僑排斥、中国の政治動乱期を経て、改革・開放後に経済発展を遂げ、国際社会におけるプレゼンスを高めていくといった大きな時代背景が個人へ与えてきた影響が映し出されている。

このような国家と国際社会の動きに人生を左右されてきたXさんの経験と語りをも、本特集の鍵概念である「三つの祖国」の観点から解釈してみたい。冒頭で述べた通り、本稿では「祖国」と「ホーム」の概念に対する考え方は軌を一にしているが、国家のみを基準にしていなかったため、ここでは「三つのホーム」に置き換えてまとめていくことにする。まず、ミャンマー（オテイエゴン）時代、家庭では父方祖先の出身地（安溪）の習慣に基づいて生活していたことから、「ルーツのホーム」を意識していたことがわかる。この華人コミュニティでは、現在も華人を結婚相手に選ぶ傾向が強く残されており、家屋に見られる装飾や祖先崇拜、ならびに華人特有の習慣に従って生活していること

も、「ルーツのホーム」に自己を位置付けている側面が見て取れる。つまり、生活の拠点から見ればミャンマー（オタイゴン）が「暮らしのホーム」になりうるが、実際に彼女が生きてきた生活空間から見ると、そこには「中国」（華人コミュニティ）のみが存在していたことがわかる。

加えて、ミャンマー（ヤンゴン）の中華学校で受けた教育内容の影響から中国を美化し、中国に自己実現の可能性を求めて帰国を選択したのであったが、Xさんにとって帰国する前の中国は「理念のホーム」として捉えられていた。

つまり、ミャンマー時代の彼女にとって中国は、「ルーツのホーム」であり、「理念のホーム」でもあり、両者は重なり合っていたのである。ところが、中国に帰国後、江西（撫州）で土地、人、文化習慣、帰属意識が乖離した状態は、かつてミャンマーで思い描いていた「ルーツのホーム」が「理念のホーム」ではなかったことに気づき、落胆し、「暮らしのホーム」としても居心地の悪さを感じ、「三つのホーム」のどれにも当てはまらない状態に置かれた。

現在は特定の場所を抛り所の基準として見た場合、かろうじて廈門が「暮らしのホーム」になりつつあるが、今後とも常態となるかどうかは定かでない。なぜなら、現在Xさんは二人の子どもが生活する場所と廈門とを行ったり来たりしているからである。

しかし、Xさんが生活してきた場所・人は、今も彼女の

前から消えてなくなつてはいない。むしろ、今もなお点と点のつながりを維持し続けている。ここで言う「点」とは、Xさんと親密に関わる人であり、その大切な人の所在地である。つまり、Xさんはつながりの複合性が創り出す「ホーム」の中に生きているのである。そのつながりは、変わらない部分を持ち続けながらも、周囲を取り巻く政治的・経済的・社会的・文化的なさまざまなファクターによって、あるいはホームを語る対象によって新たに意味づけられ続ける流動的な性質をもっている。

このようなつながりが創り出す「ホーム」は、ジェイムズ・クリフォード (James Clifford) の「ルーツ」の概念を彷彿させる。「ルーツ」は、起源を表す roots と経路を表す routes の両方の意味で使われ、クリフォードはこの概念を用いてローカルな文化や伝統と見なされてきたものが、人の転地により構築されてきたことを説明しようとした。これは「旅の翻訳」とも言い換えられる (クリフォード 二〇〇二)。Xさんにとっての「ホーム」は、roots (起源) よりも routes (経路) の方が先行するのではないだろうか。つまり、つながりの複合性が創り出す「ホーム」とは、routes (経路) そのものである。さらに、Xさんにとっての roots (起源) は一つではなく、複数存在すると解釈できる。すなわち、国家レベルでは中国とミャンマー、ならびに地方のレベルでは、父方祖先の出身地の安

溪、出生地のオタイエゴン、初めて中国を知ったヤンゴンの中華学校、帰国後最も長い間生活をした撫州、現在の生活の基盤である廈門である。Xさんはこれらすべての過去と現在のroots（起源）を抱えながら未来に向かって進んでおり、過去・現在・未来とそこで生きる生活空間の総体が「ホーム」として立ち現れていると考える。

●付記

本稿は、国立民族学博物館共同研究（若手）「帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界（二〇一一～二〇一三、代表・奈倉京子）」の成果の一部である。

●注

*1 一九八九年六月までの国名はビルマであるが、現地語の発音と日本語における言葉の定着度を重視するという観点から、本稿では現在の国名のミャンマーに統一する。

*2 西川長夫はグローバリゼーションの中で国民国家を捉えなおす際に移民の動向に注目している。これまでの移民研究は国益の側からの研究が中心で移民の側からの視点が弱かったことを指摘し、故郷を離れて移動を余儀なくされた人々の経験の中に、次の時代の可能性が読み取れると展望を述べている（西川二〇〇一…三九三―三九六）。

*3 通称僑聯。帰国華僑、海外華人の国内の家族や海外華人を対象に、日常生活に必要なさまざまなサービスを提供し、また帰国華僑と海外華人の架け橋の役割を担う、半官半民の

仲介的組織である。僑聯は中央政府、省、市、県、鎮、村にそれぞれ存在する。中国には帰国華僑、海外華人の国内の家族や海外華人のために政策決定をしたり、サービスを提供したりする組織が僑聯を入れて五つある（詳細は、奈倉二〇一一…二二―二四を参照）。僑聯以外の組織は完全に政府機関に属するため、海外華人に向けた政治的活動をしにくいのが、僑聯は政治的権力がなく、表に出やすいため政治的宣伝がしやすいという特徴がある。また、僑聯の特徴は、帰国華僑、海外華人の国内の家族や海外華人に対してさまざまな相談に柔軟に対応し、手助けをしているところにある。帰国華僑からは「娘家」（妻の実家）として慕われている。

*4 改革・開放以降、広東や福建といった華僑の出身地を中心に組織され始めた。帰国華僑聯誼会は、帰国華僑による自発的な民間の組織（社会団体）であるが、中国では登記せずに任意団体として活動するのは違法である。活動をするためには「主管単位」（行政機関ないし準行政機関といった「管理する資格があると認められた」組織）を通じて「民政」という行政部門に登記を申請しなければならない（李妍焱二〇一二…二三）。帰国華僑聯誼会の場合、僑聯が主管単位となっている。

*5 しかし、家族②の成員とつき合いがないというわけではない。アメリカ在住の伯母は、「后奶奶」の子だが、よく一緒に遊んだので仲が良く、しばしば連絡を取っている。Xさんの息子が北京の大学院在学中、アメリカへ留学した時には、彼に伯母と連絡を取るように言った。

*6 二〇一二年八月から九月にかけて、筆者はXさんの二回

目の親戚訪問に同行した。この時訪ねたXさんの親戚は、ヤンゴンでは、家族①の〈3〉の妻と〈4〉、家族②の①、オティエゴンでは、家族①の〈2〉とその息子〈5〉の家族、家族②の②であった。これに加えて、Xさんの夫側の家族も訪ね、タウングーに住む夫の母親と妹たち三人（妹はみな独身で一緒に生活をしている）と、ヤンゴンに住む妹一人を訪問した。このうちヤンゴンに住む人たちは、Xさんの親戚も、また夫の妹も、みなヤンゴン北西部の郊外（Thamine駅の近く）に住んでいた。Xさんはヤンゴン滞在中、義理の妹の家に泊まった。

●参考文献

- 足立綾（二〇一三）『ピエ・ノワールを名乗るということ——過去の共有を求めて』石川真作・渋谷努・山本須美子編『周縁から照射するEU社会——移民・マイノリティとシティズンシップの人類学』世界思想社、六三—八六頁。
- 蘭信三（二〇〇六）『序言「中国残留孤児」の問いかけ』『アジア遊学』八五、勉誠出版、四—一頁。
- 飯島真里子・大野俊（二〇一〇）『フィリピン日系「帰還」移民の生活・市民権・アイデンティティ——質問票による全国実態調査結果（概要）を中心に』九州大学アジア総合政策センター紀要』四号、三五—五四頁。
- 市川哲（二〇〇九）『新たな移民母村の誕生——パプアニューギニア華人のトランスナショナルな社会空間』『国立民族博物館研究報告』三三巻四号、五五—一五九八頁。
- 大川真由子（二〇一〇）『帰還移民の人類学——アフリカ系オ

マーン人のエスニック・アイデンティティ』明石書店。

クリフォード・ジェイムズ（二〇〇二）『ルーツ——二〇世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝他訳、月曜社。

奈倉京子（二〇一三）『中国系移民の故郷認識——帰還体験をフィールドワーク（京都文教大学文化人類学科ブックレット五）』風響社。

奈倉京子（二〇一三）『帰国華僑——華南移民の帰還体験と文化的適応』風響社。

西川長夫（二〇〇一）『増補』国境の越え方——国民国家論序説』平凡社。

範宏偉・金向東（二〇〇九）『中国ビルマ関係の分裂とビルマの華僑社会——同化時代の開始』『社会システム研究』一九号、一二九—一四七頁。

李妍焱（二〇一三）『中国の市民社会——動き出す草の根NGO』岩波書店。

Gmelch, G. (1980) Return Migration. *Annual Review of Anthropology* 9: 135-159.

Long, L. D. and E. Oxfeld (eds.) (2004) *Coming Home? Refugees, Migrants, and Those Who Stayed Behind*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Ong, Aihwa (1999) *Flexible Citizenship*. Durham & London: Duke University Press.

Ong, Aihwa and Donald Nonini (1997) *Ungrounded Empires: The Cultural Politics of Modern Chinese Transnationalism*. New York: Routledge.

Steinberg, David I. and Fan Hongwei (2012) *Modern China-*

Myanmar Relations: Dilemmas of Mutual Dependence.

Copenhagen: Nias Press.

Tsuda, T. (ed.) (2009) *Diasporic Homecomings: Ethnic Return*

Migration in Comparative Perspective. Stanford: Stanford

University Press.

廈門市印尼帰僑聯誼会編『印聯会訊』(二〇〇四—二〇一三

年)、内部発行。

●著者紹介●

①氏名……奈倉京子(なぐら・きょうこ)。

②所属・職名……静岡県立大学国際関係学部・専任講師。

③生年・出身地……一九七七年・静岡県。

④専門分野・地域……文化人類学、中国。

⑤学歴……東京女子大学現代文化学専攻、東京女子大学現代文化

研究科修士課程(現代文化基礎論専攻)、中国中山大学人文学

院(現社会学与人類学学院)博士課程(文化人類学専攻)。

⑥職歴……京都文教大学人間学部文化人類学専攻教務補佐(三二

歳、任期三年)、静岡県立大学国際関係学部専任講師(三四歳)。

⑦現地滞在経験……中国(雲南民族学院(現雲南民族大学)民族学

院・中国語の習得および修士論文作成のための現地調査・資

料収集、二五歳、一年間、中山大学人文学院・留学生、二七歳、

四年間、廈門大学歴史学院・博士研究員、三〇歳、二年間)。

⑧研究方法……中国、とりわけ香港、台湾、東南アジア地域との

関係が密接な所での長期にわたる生活経験を通して、日常生活

のレベルから人々の営みや社会の特徴について客観的に理

解するという姿勢を身につけることができた。そして地図を

国境線から見るとはならず、地域から見る面白さを体感した。

この経験が中国系移民を捉えるための視座を与えてくれた。

⑨所属学会……日本文化人類学会、日本華僑華人学会。

⑩研究上の画期……二〇〇八年の北京オリンピック、中国メディア

アは国内の盛り上がりだけでなく、海外の中国系移民の中国

に対する関心も報道し、さかんに「中華民族」を謳っていたの

を見て、グローバル時代における「中華圏」の意味について考

えさせられた。

⑪推薦図書……ユエンフォン・ウーン『生寡婦——広東からカナダへ、

家族の絆を求めて』(池田年穂訳、吉原和男監修、風響社、二〇

〇三年)。小説体のエスノグラフィであるが、筆者の豊富なフィ

ールドワークに基づいており、専門書としても一読の価値がある。